

“人生をかけて取り組むべきこと”を見つけるのはそれほど簡単じゃないと思う。ただ、卒業研究から修士での研究生生活のこの2年間を通じてはっきりと見えてきた大切なことが2つあった。『一つの事に本気で挑戦してみること』と『誰にでも出来ることを、誰にも出来ないくらい続けた先にあるもの』の2つである。

### 『一つのことに、本気で挑戦してみること』

今考えても、きっと20年後に振り返っても自分にとっての人生の大きな転機が“東日本大震災”である。被災者でもないし、東北にゆかりがあったわけではないが、震災後、ボランティア活動を始めた。大きな衝撃を受け、少しでも力になりたいと感じた自分は、自分なりの関わり方として東京で復興支援団体のメンバーとして活動を始めた。力になりたいと思って始めた活動のなかで、関われば関わるほどに自分が現地に貢献できることの小ささや挫折感を味わった。しかしその一方で自分たちの活動により、少しずつ現地の姿が変わっていく様を見た。所属も年齢も違う学生の集まりでも、共通の想いのもとに集まって活動を続けていくと、そこには驚くほどのエネルギーと変化があった。また新しい人と出会い、活動に真剣に向き合う中で、今まで知らなかった自分の能力や興味関心に気づくことになり、同時に自分に足りない事や弱い所も同じくらい見えてくることになった。“一つのことに本気で挑戦してみること”で、自分自身のあらゆる部分が見えてくる。そしてそれは自分の将来の進路や生き方を考える上で大切な要素になっていた。大学院までIT（特に通信）という世界で生きてきた自分が、社会問題に向き合うことを通して、社会に貢献できる価値を、ITの分野だけでなく、広い社会の枠組みからITを生かせる場所を考えることになった。この変化は特定のコミュニティに依存し、迷い続けていた自分にとって大きな一歩だった。

活動を通じて出会った縁から、結果的に障害者“福祉”という業界で今までのバックグラウンドを生かすことになった。直接的に通信から離れている様な印象があるが、障害者にとって、通常のコミュニケーションが取れない場面が多々ある。この道に進むことになった一つのきっかけが、津波警報を聞くことの出来ない聴覚障害者の話を聞いたことである。また同様に視覚障害者や障害によりコミュニケーションを取りづらい環境にいる様々な人がいることを知った。“通信”と一口に言っても手話などもコミュニケーションを取る一つの手段そのものであり、ITを通じて障害を抱えた人たちの壁を取り払えるような未来を作っていく事にした。今までまったく知らなかった世界に、震災を機に飛び込み模索していた先に、自分のバックグラウンドと社会問題という関心を両立する新しい道を見つけた。

### 『誰にでも出来ることを、誰にも出来ないくらい続けた先にあるもの』

ここ2年間、“自分にしか出来ないこと”を求め続けた。学生にしか出来ない支援とか、自分にしか出来ない研究だとか。ただ、本気で取り組んでみて行き着いた所は、“自分にしか出来ないことなんて、世の中には多分ない”ということだった。身の回りのいろんな所で、自分らしさとか個性とか声高に叫ばれる一方で、それは切迫感に囲まれている気がする。それを追求することは良い事でもあるが、自分はずうぬぼれていたのかもしれない。世界中で誰にも負けないスキルを持っているスーパースターなんて一握り。それを自分が持っているなんてないと思ってから楽になった。“誰にでも出来ることを、誰にも出来ないくらい続けた先に”初めて、誰にも負けないものが付いてくると感じた。

上にも書いたが、自分も活動を続けて悩む時期はたくさんあったが、自分にしか出来ないことはたぶん何一つやっていない。ただ、一つ言えるのは、誰にでもできるボランティアを派遣することを“誰にも出来ないくらい”続けていた。そして1年半が経ち、振り返った時に初めて、延べ1万人以上という誰もやっていないような数の学生を現地に派遣していたことに気づく。何でもきっと同じだと思う。イチローだって“素振り”みたいな誰にでもできることの積み重ねの先に、世界一のバッティング技術がある。研究だって、偉大な功績を上げる人も根底には本当に緻密な努力の積み重ねがある。論文を読むこと、数式と向き合うこと、目の前にできることはまだまだいくらでもある。あとはそれを愚直に続けていくことだ。

これから先もこの2つのことを念頭に、挑戦することと継続することを大切に自分の信念にして生きていこうと思う。タイトルに込めたように、きっとその先に見えるものがあるはずだ。